

宮沢賢治の〈場〉——献身と野心の原点としての「心象」

浜 下 昌 宏

## Summary

### Miyazawa Kenji's Search for the Right Place in Life and Art

HAMASHITA Masahiro

Miyazawa Kenji eventually settled in his hometown till his death after he struggled and wandered in his youth searching for what he should do for himself and people. He left us a marvelous fortune of his literary products and a legend about him as a social reformer with a lofty ideal. We owe him a lesson for life and morality. However, Kenji's last letter written ten days before his death suggests his ambition and failure of his activities in life. That seems contrary to the popular image of Kenji as someone like a saint. A man's career is generally estimated in terms of success in the world or contribution to the humanity. In spite of his repentance and underestimation by himself, we still respect him because his career is different from other people in that it was built on his inquiry into the truth of life, not on eagerness to fulfill his worldly desires. Ambition and self-sacrifice differ from each other in kind. Kenji's ambition was mainly toward literary creation, while his activities toward peasants in his native land, Hanamaki, was disinterested and self-sacrificing. Through his life and career, he searched for the appropriate place and self-expression both in his artistic creation and service to the fellow peasants. Kenji's proper place must have been in his mind in sway. It is represented as images of what he calls "shinsho" (mind image).

## 序 賢治：最後の手紙

賢治の最後の手紙は、死の年、1933年（昭和8年）9月11日付けで柳原昌悦にあてた封書である。表書きに「稗貫郡亀ヶ森小学校内 柳原昌悦様 平安」と、封の裏には「九月十一日 花巻町 宮澤賢治」と書かれ、封印としてメが記されている。その内容は次のようなものである。

八月廿九日附お手紙ありがたく拝誦いたしました。あなたはいよいよご元気なやうで実に何よりです。私もお蔭で大分癒っては居りますが、どうも今度は前とちがってラッセル音容易に除くくママ>らず、咳がはじまると仕事も何も手につかずまる二時間も続いたり、或は夜中胸がびうびう鳴って眠られなかったり、仲々もう全い健康は得られさうもありません。けれども咳のないときはとにかく人並に机に座って切れ切れながら七八時間は何かしてゐられるやうくママ>なりました。あなたがいろいろ想ひ出して書かれたやうなことは最早二度と出来さうもありませんがそれに代ることはきつとやる積りで毎日やつきとなつて居ります。しかも心持ばかり焦つてつまづいてばかりゐるやうな訳です。私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについてもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却つて完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてみた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。あなたは賢いしかういふ過りはなさらないうでせうが、しかし何といつても時代が時代ですから充分にご戒心下さい。風のなかを自由にあるけるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の当然の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際と余り遠いものです。どうか今のご生活を大切にお護り下さい。上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きます。いろいろ生意気なことを書きました。病苦に免じて赦して下さい。それでも今年は心配したやうでなしに作もよくて実にお互心強いではありませんか。また書きます。（全集15（本文篇）、458-460）

まず、注釈をつけておこう（全集15（校異篇）、310；堀尾、451）。この手紙の宛名人の柳原昌悦（やなぎはらしょうえつ）は、明治42年に生れ、平成元年に死去。稗貫郡八幡村（現、石鳥谷町）出身、大正14年花巻農学校に入学、賢治は大正10年より15年まで同校に勤務していた

ので、最後の1年間だけの生徒であった。後、岩手県師範学校に進み、卒業後、稗貫郡亀ヶ森小学校教員を経て（このときに上掲の賢治の書簡を受け取る）、昭和15年に茨城県の内原満蒙開拓訓練所に入り、翌年、満州開拓地へ行き、そこで終戦を迎え、帰国後、岩手県で開拓に従事する。賢治に教えを受けたのは1年間に過ぎないが、在学中は絵画・音楽の指導も受け、賢治退職後も花巻町・石鳥谷町の肥料設計所に手伝いに呼ばれる。賢治からの書簡のほとんどを満州の終戦時になくす。

さて、この手紙のうち、とくに読み返すことを迫るのは、次の箇所であろう。それは、ある意味で聖人にも比される、典型的ともいえる賢治のイメージを覆しかねない。（下線部は引用者。）

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてみた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

この一節の注釈には時代背景と賢治の社会的関心・活動とに目を向ける必要があろう。この手紙を見て、やはり彼もわれわれ同様の世俗的野心を持った俗人であったという感想を持つ者がいても不思議ではない。とりわけ、賢治生誕100年を祝った1996年前後頃からさかんに出版された、賢治の言説の政治的・イデオロギー的含意の暴露に精出す、カルチュラル・スタディ風の賢治批判・賢治崇拜者批判の論者たちには（cf. 関井・村井・吉田・柄谷）、この手紙こそ“聖”賢治の虚像を賢治自ら壊す証拠であろう。この手紙を受け取った柳原も、その経歴では賢治の影響を相当に受け、満蒙開拓団に入ったのもそれゆえかもしれない。となると、旧日本軍主導による満蒙侵略の先兵を賢治の弟子たちが担った…ということになるのか？ 関東軍の参謀であった石原莞爾は賢治と同じく法華の熱心な信者で、同じく国柱会に属していた。かの八紘一宇という大東亞戦争のスローガンは国柱会の創設者田中智学の造語であった。この手紙が吐露している賢治の野心といい、柳原らを育てた賢治のイデオログ的役割といい、なかなか賢治は生臭い人間として浮かび上がるかもしれない。賢治の生真面目さ・真摯さを不快に思い、賢治ファン・研究者の素朴さを笑止とする者には、野心（金・力・名声・成功、いずれであれ）を示唆する賢治の心情こそ、格好の攻撃材料となりうる。

とはいえ、賢治が生きた明治末期から昭和初期の時代を回顧すれば、そうした時代に翻弄されたと悔悟する彼の気持が理解できるかもしれない。東北地方の凶作（1902、1905、1913、ほか）とその翌年の飢饉、戦争（日露、第一次世界大戦、満州事変）、関東大震災（1923）、米騒動（1897、1918）、労働争議・小作争議、大逆事件（1910-1911）といった社会的騒乱・激動

や災害と併行して、一方で電燈の普及、国鉄支線のあいつぐ開通、活動写真館の増大、電話機の設置、といった環境が整備され、賢治の地元でも、岩手公園の開園（1906）、稗貫郡蚕業講習所（のちに花巻農学校）開設（1907）、盛岡・宮古間に定期バス運行開始（1913）、岩手軽便鉄道全通（1915）、花巻温泉の開業（1923）、というように近代化が進む。さらに、第一次世界大戦の戦争景気で鉱山・造船による成金ブーム（1915ころ）、貿易高がうなぎのぼりになり海運ブーム（1916ころ）などの経済の発展と同時に、昭和に入る頃には米価・物価の高騰による騒動や、株式・綿糸・生糸の暴落によって政情不安の時代に入っていく。

そうした社会情勢の中に生きた賢治もまた、日本人の“昭和の精神史”に位置づけることは不可能なのか。大東亜戦争へと突入するに至った昭和前期の流れの中に、竹山道雄も桶谷秀昭も賢治の名前など挙げはしない（cf. 竹山；桶谷）。それは彼らがシナ事変や5・15事件、2・26事件の思想的背景に正統的な日本精神史をみようとするからであり、しよせん賢治のいた所は地域的・辺境的であって、エリート・インテリゲンチヤや開明的教養人とは無縁の地平であろう。

5・15事件の檄文を読み直してみよう。「日本国民に檄す」と題されたそれは、「日本国民よ！

刻下の祖国日本を直視せよ／政治、外交、経済、教育、思想、軍事……何処に皇国日本の姿ありや」云々、と壮語が展開される。決起した青年将校たちの憂国の思いにも、無私的で自己犠牲的な真摯な精神があったであろう。それにしても訴える調子は「祖国」と言い「日本」と言い、そして「皇国」とイデオロギーむきだしである。他方、賢治が宣言する「農民芸術概論綱要」は、「……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……／おれたちはみな農民である

ずいぶん忙がしく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい」、と穏やかに等身大で語りかける。そこには、「世界」については論じられるが（「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」）、「国家」という語はひとつも出てこない。それが、中央と地方との違い、正史的正統教養人精神史と外史的辺境民衆精神とのちがいのなかであろうか。

保田與重郎による賢治批判もたしかにある面では正当であろう（押野、85—85）。賢治には古典や歴史の正統との延長線上の創作はない。しかし、たしかに時代と社会に関わる意識が強かったゆえに社会改革者・農民教育者としての賢治の活動があった。それと同時に、時代や社会とは別の所で、賢治は彼なりの〈場〉を求めていたように思われる。その〈場〉とは何であったか。

さて、この手紙から痛切に響いてくるのは賢治の自嘲・自己批判・悔恨の思い（「私のかういふ惨めな失敗」）である。自らの創作活動と理想主義を悔い（「空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず」）、その結果ひとりいい気になって孤立し（「たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得る」）、そして人生の最後を覚悟して後輩たちに自分の轍を踏ませぬように忠告しているのである。しかし、我々の目には、彼の献身・自己犠牲の実践活動になにも疚しさは感じられないように見える。彼の悔恨も彼特有の自己批判に厳しい心情の表れであろうか。献身の底意に野心や浅はかな利害関心があっては偽善とみなされ

得る。むろん、献身は奴隸的従属でもなければ、主体性なき無原則の黙従でもないはずである。とりわけ賢治の場合、宗教的信念・社会批判の確信に基づく指導・啓蒙・教育であった。そのような賢治に対する追慕の強い思いを、彼の友人たちが捧げた次の弔辞が語っている。

## 弔辞

あなたは梨の花の匂ひがするやはらかい雲の上で、今頃何を思って居られるでせうか

諸々の美と真と善のみを愛し一切己を捨て、あなたは従容と善逝（スガタ）から来て善逝へかへられた

あなたの存在は私どもにとっては何であつたらうか。私どもは明智神のやうなあなたに対してお世話やおへつらひを一言ものべる必要を認めない。あなたは私どもの人生にとって太陽でありあなたの広い大きい愛の力、そして無数の作品は、私どもの生活の日夜を照して下さいました

私どもは今真暗い中に呆然と立ってゐるやうな気がしますが、しかし仏様のやうなあなたの棺に入られた時のお顔をしっかりと頭の底にきざみつけて生きてゆかうと思ひます

あなたは何故あなたの人間力を芸術をもっと正当な自信と誇りを以て世に主張されなかつたのでせうか。私どもはあなたをあなたの芸術を世界第一流のものとして、大きいほこりを持つのに御本人のあなたは、この世のものでないやうな謙譲でひたすらかくして居られました。この町の人々は、この国の人々は、そして日本の人々は五十年或は百年の後に、あなたがどのやうに偉かつたかといふことがわかるでせう

あなたの輝しい沢山の遺稿を目のあたりに見て私どもは芸術の不滅であることを確信します。そしてあなたの残されたこの芸術をふかく考へれば、あなたの死が肉体の、すなはち形上の死であることがわかります。しかしながら私どもはつまらぬ凡人ですから、目の前にあなたを見る事が出来なくなったことに対して、誰にも訴へやうのないやうなはげしいかりとかなしみを感じます

あゝ、そして永生の壮麗な光の園の中に静におねむり下さるやうに  
光美しき秋、そして哀しみ極まる日に

昭和八年九月二十三日

森 惣一  
藤原 嘉藤治  
母木 光

この用辞に見られる賢治像は、いまなお多くの賢治崇拜者の共通して持つものであろう。そうした無私的献身と、一方で野心との関係は、賢治にあってどのような関連をもっていたのであろうか。

## 第一章 賢治：心のざわめき

賢治の複雑な心を追跡するには、まず詩集を再読するのがよいだろう。そこに賢治の原初的な存在の証、つまり不安・所在無さ、といった心のゆれを容易に認めることができる。

『春と修羅』第一集（大正11年、12年）と第二集（大正13年、14年）とのちがいは何なのだろうか。漠然とした印象では、前者には心の苛立ち・ざわめきがより鮮烈に響いているように思われる。たしかに、第二集にも「未来圏からの影」と題された、

吹雪（フキ）はひどいし  
けふもすさまじい落盤  
　　．．．．．どうしてあんなにひっきりなし  
　　凍った汽笛（フエ）を鳴らすのか．．．．．  
影や恐ろしいけむりのなかから  
蒼ざめてひとがよろよろあらはれる  
それは氷の未来圏からなげられた  
戦慄すべきおれの影だ  
（賢治1、466）

といった外景と心象とを強烈に重ねた詩があるが、やはり第一集と比べると、かなり冷静さ・落ち着きがみられる。たとえば、冒頭の詩「序」からして、

この一卷は  
わたくしが岩手県花巻の  
農学校につとめて居りました四年のうちの  
終りの二年の手記から集めたものでございます  
（賢治1、283）

といった、いくぶんシニカルな調子もある文体である。そしてはっきりとした口調で「わたしはどこまでも孤独を愛し／熱く湿った感情を嫌ひますので」（賢治1、285）と言い、

けだしわたくしはいかにもけちなものではありませんが  
自分の畑も耕せば

冬はあちこちに南京ぶくろをぶらさげた水稲肥料の設計事務所も出して居りまして  
おれたちは大いにやろう約束しようなどといふことよりは  
も少し下等な仕事で頭がいっぱいなのでございますから  
(賢治 1、285)

という、半ば冗談とも取れる、また自嘲的にも聞こえる、屈折した心情で自己分析的自己紹介をするのだが、この一節に続けて、さらに書いていることは、

さう申したとて別に何でもありません  
北上川が一ぺん氾濫しますと  
百万疋の鼠が死ぬのでございますが  
その鼠らがみんなやっぱりわたくしみたいな云い方を  
生きてるうちは毎日いたして居りまするのでございます  
(賢治 1、285-286)

——ここで語られている「わたくし」は、いったい第一集「序」の「わたくし」と同一者なのだろうか。後者のその有名すぎる出だしをあらためて引いておくと、

わたくしといふ現象は  
仮定された有機交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
(あらゆる透明な幽霊の複合体)  
(賢治 1、15)

たしかにここでも、その「わたくし」は、

風景やみんなとつしよに  
せはしくせはしく明滅しながら  
いかにもたしかにとりつづける  
因果交流電燈の  
ひとつの青い照明です  
(ひかりはたもち その電燈は失はれ)  
(賢治 1、15)

という、対象や風景・同朋と交感・相互作用をしながら（「すべてわたくしと明滅し／みなが同時に感ずるもの」）、活動する自我ではある。その自覚があればこそ、原詩に対していくたび



も削除・訂正を加えるという知的営為を継続しながらも、賢治は恥じらいもなく・臆面もなくおのれの心の葛藤・叫びを、それを抑えられないおのれの未熟さ・無能さともども曝け出し、詩という記録として遺したのであろう。

「屈折率」では「わたしは<…>／急がなければならないのか」（賢治1、20）と自問をし、「くらかけの雪」では「たよりになるのは／くらかけつづきの雪ばかり」「野はらもはやしも／ぼしやぼしやした黝んだりして／すこしもあてにならないので」「ほのかなのぞみを送るのは／くらかけ山の雪ばかり／（ひとつの古風な信仰です）」（賢治1、21）と、気持ちを不確かな自然現象（雪）に託す己のたよりない心情を詠う。

「わたくし」「わたし」が「ほく」に代わる詩もある。「恋と病熱」では「けふはほくのたましひは疾み／鳥さへ正視ができない」「けふはほくもあんまりひどいから／やなぎの花もとらない」（賢治1、28）、と衰弱する自分（と弱気の自我）を語る。

「高原」という一編の「海だべがど おら おもたれば／やつぱり光る山だたぢやい」（賢治1、114）に出てくる「おら」には愛嬌があるが、「おれ」が使われる詩には意志と情念の強さを思わせるものがある。繰り返し「おれはひとりの修羅なのだ」（賢治1、29；30）と叫ぶ「春と修羅」の「おれ」は自我意識を前面に出す。また、「真空触媒」中で、「おれは新しくてパリパリの／銀杏なみきをくぐつてゆく」（賢治1、48）、「おれはやつぱり口笛をふいて／大またにあるいてゆくだけだ」（賢治1、49）、「ところがおれはあんまりステツキをふりすぎた」（賢治1、49）、「おれなどは石炭紀の鱗木のしたの／ただいつびきの蟻でしかない」（賢治1、52）、「おれのかくしに手を入れるのは／なにがいつたい保安掛りだ」（賢治1、56）、「それどこでない おれのステツキは／いつたいどこへ行つたのだ」（賢治1、59）、「おれはたしかに／その北極犬のせなかにまたがり／犬神のやうに東へ歩き出す」（賢治1、61）といった調子の「おれ」は、俗物紳士を気取った偽悪的演技をする己を演出する。

そうした「おれ」と「わたくし」「わたし」とが併存するのが「小岩井農場」である。

「パート一」は「わたくし」の頻出が詩の格調を損なうかのようにも読める。1行目で「わたくしはずるぶんすばやく汽車からおりた」（賢治1、68）で始まると、8行目「たしかにわたくしはさうおもつてゐた」（賢治1、68）、11行目「ひとあしでるとき……わたくしもでる」（賢治1、68）。さらに「わたくしはあるいて馬と並ぶ／これはあるいは客馬車だ／どうも農場のらしくない／わたくしにも乗れといへばいい」（賢治1、69）。

ところが、「パート二」「パート三」で「おれ」が登場する。「本部へはこれでいゝんですかと／心細さうにきいたのだ／おれはぶつきら棒にああと云つただけなので／ちやうどそれだけ大へんかあいさうな気がした」（賢治1、76）、「白樺は好摩（かうま）からむかふですと／いつかおれは羽田軍属に言つてゐた」（賢治1、77）。内省的な「わたくし」に対して、対人的な意識の強い「おれ」が頭をもたげる。また、その「おれ」は強い意志を示唆する、いわば対人的であるかのように自分に対して主張する自我を意味する。

いまこそおれはさびしくない  
たつたひとりで生きて行く  
こんなきままなたましひと  
たれがいつしよに行けようか  
(賢治 1、86)

そうした「おれ」と比べ、周囲と調和的に、いたずらに自我意識を屹立させない「わたくし」がある。

わたくしは白い雑囊をぶらぶらさげて  
きままな林務官のやうに  
五月のきんいろの外光のなかで  
口笛をふき歩調をふんでわるいだらうか  
(賢治 1、87)

ところが、最後の「パート九」になると、風景・環境・状況と調和すべき「わたくし」が「おれ」のように自我意識の高揚を見せる。調和と孤立の狭間で葛藤しているかのように、それはゆるる「わたくし」である。「すきとほつてゆれてゐるのは／さつきの剽悍な四本のさくら／わたくしはそれを知つてゐるけれども／眼にははつきり見てゐない／たしかにわたくしの感官の外で／つめたい雨がそそいでゐる <…>ユリアがわたくしの左を行く／大きな紺いろの瞳をりんと張つて／ユリアがわたくしの左を行く／ペムベルがわたくしの右にゐる <…>わたくしははつきり眼をあいてあるいてゐるのだ／ユリア ペムベル わたくしの遠いともだちよ／わたくしはずるぶんしばらくぶりで／きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た／どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを／白亜系の頁岩の古い海岸にもとめただらう」(賢治 1、96-98)。その直後に「《あんまりひどい幻想だ》」という一行の独白が入って、

わたくしはなにをびくびくしてゐるのだ  
どうしてもどうしてもさびしくてたまらないときは  
ひとはみんなきつと斯ういふことになる  
(賢治 1、98)

旅に出て「小岩井農場」を訪れた賢治は農場内を散策し、緑と大気を満喫し、馬を見、農夫と言葉を交わしながら、思索し幻想を見る。そして「さうです 農場のこのへんは／まつたく不思議におもはれます／どうしてかわたくしはこころを／der heilige Punkt と／呼びたいやうな気がします」(賢治 1、98)、という直観を得るに至る。

では、そのような「わたくし」「わたし」「ほく」「おれ」といった使い分けは、すでにある程度推論をしてはいるが、いかなる事態を意味しているのだろうか。約言すれば、賢治の心のゆれ・ざわめきを示している。それはいったい何ゆえのざわめきか。

ひとつには、孤独という実存的極限状況との直面である。

もうけつしてさびしくはない  
なんべんさびしくないと云つたところで  
またさびしくなるのはきまつてゐる  
けれどもここはこれでいいのだ  
すべてさびしさと悲傷とを焚いて  
ひとは透明な軌道をすすむ  
ラリツクス ラリツクス いよいよ青く  
雲はますます縮れてひかり  
わたくしはかつきりみちをまがる  
(賢治 1、101)

また、青春の恋愛感情も心を乱すだろう。ただし、賢治の場合はその恋愛感情は宗教的でもあり動物的でもあるが、その弁別に苦闘するゆえに心の乱れが生じている。

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで  
もしも正しいねがひに燃えて  
じぶんとひとと万象といつしよに  
至上福祉にいたらうとする  
それをある宗教情操とするならば  
そのねがひから砕けまたは疲れ  
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと  
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする  
この変態を恋愛といふ  
そしてどこまでもその方向では  
決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を  
むりにもごまかし求め得ようとする  
この傾向を性慾といふ  
(賢治 1、100)

失った肉親、愛する妹（トシ）への追慕も、一種の恋愛感情として不安な心の状態をいっそう苦しめる。「オホーツク挽歌」中の「青森挽歌」には、

あいつはこんなさびしい停車場を  
たつたひとりで通つていつたらうか  
どこへ行くとわからないその方向を  
どの種類の世界へはひるともしれないそのみちを  
たつたひとりでさびしくあるいて行つたらうか  
(賢治1、176)

かんがへださなければならぬことは  
どうしてもかんがへださなければならぬ  
とし子はみんなが死ぬとなづける  
そのやりかたを通つて行き  
それからさきどこへ行つたかわからない  
それはおれたちの空間の方向ではかれない  
感ぜられない方向を感じようとするときは  
たれだつてみんなぐるぐるする  
(賢治1、178)

たしかに、詩という形式そのものが、整理しかねている心のざわめきを表現しているのである。しかし、賢治は詩からどこへ向つたのか。心のゆれを紛らす方向へとは決して向わなかつたのが賢治の生涯であった。芸術的創作の面では、仏教説話的要素を含んだ童話、短歌、文語詩と、文芸的表現は一生続けられる。併行して、彼の実践的活動がめざましく、幾多の挫折もものかわ、間断なく続けられる。若い子弟への教育、農民への支援・啓蒙、土地と肥料の改良による豊作への実際的努力、などである。

## 第二章 賢治：献身と野心

文芸創作と併行する賢治のもうひとつの実践とは、精力的な社会的活動である。その軌跡のごく一部を追ってみよう。

1917 (T6)、21歳(盛岡高等農林学校生)、江刺郡地質調査。

1918 (T7)、22歳(同校研究生、のち同校実験指導補助)、稗貫郡土性調査。

1920 (T9)、24歳、国柱会入会。

1921 (T10)、25歳、父の改宗ならず家出、上京して国柱会で奉仕。稗貫農学校教諭。

1922 (T11)、26歳、農学校教諭、音楽・演劇の創作・指導。

1923 (T12)、27歳、花巻農学校教諭。

1926 (T15)、30歳、花巻農学校依願退職。羅須地人協会設立。1928 (S3)、32歳、肥料稲作巡回相談、夏旱天で稲作指導で奔走。

1931 (S6)、35歳、碎石工場技師嘱託。石灰販売に奔走。

——年表を追って賢治の足跡をたどると、響いてくるのは、まず<奔走>ということである。彼は、稲作指導や石灰販売に奔走する。次に、<膨大な枚数>とでも呼ぼうか、文芸活動の面での、1921年2月に国柱会の高知尾智耀から法華文学の創作を勧められ一ヶ月に3千枚書いたという(堀尾、116)エピソードもすさまじいが、1927年に肥料設計書2千余枚書いたという集中力も驚異的である。そして第3に、<病氣>である。

成人後の賢治の病歴をかんとんに追ってみよう(堀尾、456-462;原、865-910)。1921年、家出、上京して国柱会に属して布教と創作に熱中していたときに脚氣に罹る。粗食で水とジャガイモで過ごした日が多かったらしいが、友人宛には肉食のため、と書き送る。1928年、羅須地人協会の活動で開墾・稲作指導・肥料設計・農民への教育・創作・勉強の疲労の上、自炊生活の栄養不足から衰弱し、ついに発熱、急性肺炎にかかり両側肺浸潤と診断される。1931年の1月1日付書簡では「私もどうやらもと通りのからだになりました」と書いているものの、4月5日発熱臥床、11日頃同じく発熱臥床、5月17日-18日発熱臥床。9月に上京中、20日発熱臥床(遺書まで用意する)、そして27日に父に「もう私も終りと思ひます」と電話して28日に花巻に戻ると以後病臥。1932年はほとんど病臥の状態、そのなかで肥料設計や創作の仕事をこなす。1933年も自宅療養状態で東北碎石工場の仕事の相談や創作。そして9月20日、急性肺炎をおこし、21日咯血、逝去する。賢治の献身は自らの身体を痛めるほどであった。そのような賢治が、とても野心で動いていたとは思われない。

賢治と賢治研究、賢治と賢治研究者・崇拜者を区別することが必要であろう。すべてにメダルのような両面があり、光と闇、明と暗、表と裏、真実とごまかし、などと対比されるが、賢治においても、それはたとえば賢治の禁欲と春画の収集といった下世話な視点からでは不毛であろう。そうではなく、伝記作者における賢治聖化を批判する「真実とごまかし」(青江1974)、また精神病理学的に賢治の行跡をみて「光と影」を対比する(福島1996;矢幡1996)ことで、賢治自身の性格に見られる二重性と、賢治崇拜者・研究者が賢治を論ずる際の二重性との両者を区別する必要がある。

では、献身と野心というのは二重の規準(double standard)なのか?

野心は権力への意志を意味し、露骨な自己利益・関心の追求でもある。当然ながら、野心は他者に対して支配・命令・君臨することの快樂という、獸的性質を帯びる。他方、献身は賢治の場合、奴隸的従属・無原則の黙従・唯々諾々、主体性なき追従、ではない。賢治の場合、あきらかに、信念・理想・確信に基づく判断と行動・指導と教育が献身の内容であった。

賢治を聖人視する賢治礼賛論は、むしろ賢治に帰依することで論者は自立することの困難さと服従することの安逸を表明している。それは、適正な自己の利害関心の欠落を意味するのであろう。自分が何をしたいか、何を欲しているかがわからない場合に自己放棄的に盲目的追従を道とするが、それは主体性の放棄であり、賢治(像)との距離の取り方に失敗している。

そもそも、利他的行為(altruism)はありうるのか? われわれは殉教者を思い描く。主義主張・信仰の共同体のために自己犠牲を捧げる、友愛・人類愛的献身のすがたである。この場

合の自己犠牲つまり献身は、それ自体がいわば自己実現であると同時に自己超越でもあろう。賢治の場合の、野心としての献身、そしてまた、文芸創作的野心と、社会改良の実践的献身という対比も可能である。献身と野心という二項対立的図式は、当人以外の部外者（分析・解釈・研究者）による便宜的な切り取りであろう。賢治を理解するためには、献身と野心を複雑に統合しているはずの、賢治ならではの〈場〉のありかを求める必要があるだろう。

### 第三章 賢治の〈場〉

漱石『三四郎』の主人公が立身出世の野心を抱いて上京する行動はきわめて単純な動機の内面的な選択であった。その野心のために場所を移動するのである。他方、西田幾多郎の「場所の論理」はきわめて形而上学的な意識場を主題化するものであった。では、賢治の生涯を、上記ふたつのモデルで考えるとどのように理解することができるだろうか。彼は詩人であり（歌人・童話作家）、宗教者であり、社会改良家でもあった。国柱会という法華経を奉ずる宗教団体に自分の道を委ねようとして上京した経験もある。ばくだいな数の童話作品を書き上げて世に問おうとしつづけた。一途の自己犠牲的で献身的な賢治の生涯も、一見わかりやすい、聖者的な生き方のように見える。ところが、彼の最後の手紙が彼の複雑な心を明かしている。自分の生涯は失敗であり、世俗の野心は報われなかった、と。俗人と同様の志向を見せたとして、それでも彼に対する尊崇の念を我々は失うことはないだろう。なぜか。野心があれば献身は偽善というのではあるまい。我々は賢治における矛盾的事態を〈場〉の追求におけるふたつのアスペクトとして捉える。すなわち、一方は言語空間という〈場〉であり、他方は故郷特定による〈場〉であり、両者は二重構造でもあり、相互往来的な関係でもあった。しかし、両者を統合する上位の〈場〉こそ、賢治の存在を輝きあるものとしているはずである。そして、その両者をつなぐのが、「心象」と彼が呼んだ「心のざわめき」であったと解釈しておきたい。

植田敏郎が注目するように（植田、63-76）、「心象」とは「心的現象」の縮約形であり「心的現象」とは、賢治の愛読した片山正夫『化学本論』と同じ大正4年に発刊された元良勇次郎『心理学概論』で提示されており、それは「主観と客観とをはるかに越えた見地に立って心の奥深い微妙なところを闡明しよう」（植田、67）とする概念である。しかも、心像と心像とを結びつけるのに、「ある緊張や努力をともなう」（植田、75）という精神物理学的な要素を考える必要がある。つまり、賢治の「心象」がそうであるように、たんなる心的現象・表象ではなく、そこに心的エネルギーのベクトルが含まれているような力動的な〈場〉こそ、矛盾的事態（献身と野心）の総合を方向付けるものではないのか。そのような力動的なものとして「心象」を捉える視点は太田には薄いだが、しかし、「心象」を神秘的な精神作用として、神秘体験・幻想体験・宗教体験に不可分な意識現象として理解することは（太田、60-65）正当であろう。小野寺がペーター・ヴストを引いて彼の「故郷に還ろうとする思惟」（heimkehrendes Denken）に注目する際（小野寺1983、12；43）、原初的自然の形而上学的風土としての賢治の「イーハトーヴ」を捉えるのであるが、しかし私は、賢治の「心象」（=心のゆらぎ）を上述のような

<場>として意義付ける方位を選びたい。

賢治は一方で文芸に対しては、「私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しやうと企画し、それを基骨としたさまざまの生活を発表して、誰かに見て貰ひたいと、愚かにも考へたのです」(全集15、222)、と語りながら、実人生的には、「どうせ家を飛び出したからだですから、どこへ行ってもいい訳ですがいろいろの事情がもうしばらく、或は永久に、私をこゝへ縛 [しば] りつけます」(全集15、223)、という覚悟を語っている。そして、

手は熱く足はなゆれど  
われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の  
をちこちに美ゆくも成りて  
燦々と暗をてらせる  
その塔のすがたかしこし  
(賢治 2、525)

と詠じるとき、それは、故郷回帰的な、「西田哲学の「絶対無の場所」にも似た“der heilige Punkt” (聖なる地点)」(小野寺2001、15)を垣間見たからであろう。それゆえに、「手は熱く足はなゆれど／われはこれ塔建つるもの」という<場>が創造できたのであろう。回帰すべき「故郷」とは、賢治の場合、むろん生れ故郷に限定されず、また「イーハトーヴ」という理念化されたものに限らず、先に挙げたペーター・ヴストの「故郷に還ろうとする思惟」(heimkehrendes Denken)、つまり自らの思索の「住処」(Heimat)である。それこそが、賢治の場合は最後まで心のゆらぎの源泉でもあり表現でもあった「心象」であったのではあるまいか。それが現われとしては、ときに献身的実践となり、ときに野心的感情心理を含むものとなったに過ぎない。その意味では賢治は、野心は仮にあったとしても、社会的実践家としては成功できるほど有能とはいえず、詩人という存在性格こそが賢治を規定しているのであろう (cf. 浜下)。詩人的「心象」は、本稿第一章でみたように、「わたくし」「わたし」「ぼく」「おれ」という「心のざわめき・ゆらぎ」によって産出され続けていたのである。

#### [References]

賢治 1：『宮沢賢治全集 1』ちくま文庫、1986

賢治 2：『宮沢賢治全集 2』ちくま文庫、1986

全集15 (本文篇)：『校本 宮沢賢治全集 第15巻』(本文篇) 筑摩書房、1995

全集15 (校異篇)：『校本 宮沢賢治全集 第15巻』(校異篇) 筑摩書房、1995

原子朗『新宮沢賢治語彙辞典』東京書籍、1999

- 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』中公文庫、1991  
青江舜二郎『宮沢賢治—修羅に生きる』講談社現代新書、1974  
植田敏郎『宮沢賢治とドイツ文学』講談社学術文庫、1994  
大塚常樹『宮沢賢治心象の宇宙論』朝文社、1993  
桶谷秀昭『昭和精神史』（平成4年初版）文春文庫、1996  
小野寺功『大地の哲学—場所的論理とキリスト教—』三一書房、1983  
小野寺功『賢治・幾多郎・大拙——大地の文学』春風社、2001  
押野武志『宮沢賢治の美学』翰林書房、2000  
関井光男・村井紀・吉田司・柄谷行人「共同討議 宮澤賢治をめぐって」『批評空間』II-14（1997）  
竹山道雄『昭和の精神史』講談社学術文庫、昭和60年  
浜下昌宏「賢治と「女性」（2）」『女性学評論』4号（1990）（『妹の力とその変容』近代文芸社、2002、第8章）  
福島章『不思議の国の宮沢賢治—天才の見た世界』日本教文社、1996  
矢幡洋『賢治の心理学—献身という病理』彩流社、1996

（本稿は2000年度本学研究所研究助成による研究成果の一部である。）

（原稿受理 2002年4月16日）